

その本は、書店の児童書コーナーに置かれていた。『それでも、海へ』と題された写真絵本だ。主人公は、陸前高田市で漁師を営む菅野修一さんと孫の修生君。東日本大震災の津波で変わり果てた町の姿を見て、海に出ることをやめてしまった菅野さんが、修生少年の「じいちゃんがつてきた白いお魚が、もう一回食べたい」と言った言葉で再び海へと向かう再出発の物語だ。

初めて写真絵本を手掛けたという安田菜津紀さんが、この絵本を通して子どもたちに伝えたかったことは何か。安田さんはあどがきにこ

月のない夜にも 過ぎし方はきつとある

「家族とは何か」を自らに問い続けた一七歳の少女は、一人では抱えきれない苦しみの答えを求めてカンボジアを訪れた。そこで「大きな声にかき消されてしまう小さな声を伝える」という自身の使命と出会い、フォトジャーナリストになった。何を伝えるのか、何のために伝えるのか。安田さんの信念を支える原点とは。

フォトジャーナリスト

安田 菜津紀

う記している。

「じいちゃんの営みにカメラを向けることは、命を見つめ、とことん向き合うことでした。だからこそこの町で、少しでもシャッターを切り続けたいと思っています。その一枚一枚が、ここで再び輝こうとしている宝物を少しでも多くの人と分かち合いたいという、願いのものです」

「心が壊死する」

安田さんには、フォトジャーナリストという職業に自分を導いてくれた明確なきっかけがある。高校二

年のときに過ごしたカンボジアでの

一〇日間だ。NPO「国境なき子どもたち」が主催する「友情のレポーター」に選ばれたのだ。アジアの国々に日本の子どもたちを派遣して取材させるプログラムで、「あれがなければ、今の仕事には就いていなかったと思います」と安田さんは断言する。

「そもそも海外に行くことや、人を助けるということに、特別高い意識をもっていたわけではありませんでした。ただ、当時の私は、家族ってなんだろっ」ということを考えざるを得ない状況だったんです」